別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　俵章浩

本論文は、十一世紀にイラン地域で活動したイブン・スィーナーの生命思想を論じたものである。イブン・スィーナーの著作はのちのヨーロッパの思想に大きな影響を与えたことで知られているが、これまで研究対象となる著作は、ヨーロッパに対する影響といった観点から選ばれる傾向があった。さらに研究者の関心に応じて、哲学書のみ、あるいは医学書のみが対象にされ、学問ごとに個別に研究されてきた歴史がある。しかし、多くの学問領域に著述を残しているイブン・スィーナーの思想を的確に評価するには、これまでの研究手法には限界がある。俵章浩氏の論文は、プネウマ／ルーフ概念の歴史分析を基軸に据え、同概念と生命観および魂観の関連を明らかにすべく、複数の学問領域のさまざまな著作を分析し、多角的にイブン・スィーナーの生命思想に迫ろうとしたものである。

本論文は序、四つの章、結論から構成される。序では、論文の目的および研究の特色が紹介される。第一章「イブン・スィーナー以前のルーフ概念の展開」では、古代ギリシア時代からイブン・スィーナーが生きた中世イスラームの時代までのプネウマ／ルーフの理論が紹介される。第二章「ルーフ概念の洗練」では、イブン・スィーナーのルーフ理論の特徴が紹介される。特に『心臓の薬』におけるルーフ概念が取り上げられ、それよりも前に書かれた『医学典範』のルーフ理論との比較から、「輝き」という性質がルーフに付されている点が特徴的であると説明される。第三章「生命の定義の変化」では、初期著作と後期著作の比較から、イブン・スィーナーが生命の定義を変えたことが説明される。この生命定義の変化の契機となったのが医学書『医学典範』の議論であることが論じられ、医学的議論から哲学的議論への影響が確認される。第四章「『帰還』の議論における魂とルーフ」では、イブン・スィーナーの魂論の分析を通じて、魂概念との関連が強いルーフ概念のさらなる明確化が試みられる。この章では宗教的著作である『犠牲祭の論考』が主に取り上げられる。最後の結論では、以上の議論を踏まえた上で、イブン・スィーナーの生命思想を理解するための視座が提示される。

審査においては、本論文が医学的著作に加えて哲学的著作や宗教的著作まで分析の対象とすることでイブン・スィーナーの思想を多角的に捉えている点が高く評価された。こうした手法は、ポリマスであるイブン・スィーナーの思想の実態をより正しく捉えるものである。

こうしたアプローチによって以下に挙げることに成功している。

まず、これまでの教科書的理解では、イブン・スィーナーの医学思想をアリストテレスとガレノスの総合ととらえることですませてきたが、アリストテレスやガレノスに還元できない点があり、そうした点にこそイブン・スィーナーの思想の特徴があることを明快に指摘している。特にルーフ

概念に関してその点が明らかにされている。この指摘が可能であったのは、これまであまり研究の対象となってこなかった『心臓の薬』という医学的著作の丹念な読解による。

次に、生命の定義をイブン・スィーナーが変更していることを指摘している。この点については、一章を割いて論じられている。俵氏は、アリストテレス哲学の原則から逸脱するような生命の定義がイブン・スィーナーの後期著作『治癒の書・植物論』に見られることを指摘し、それ以前に書かれた著作の中にその原因を探っていく。イブン・スィーナーの生命思想の中核にアリストテレス哲学の枠を踏み越える考え方があることを提示している点は、イスラーム思想研究への重要な貢献であると言える。

また他に本論文の貢献としては、イブン・スィーナーの思想における諸学の間にある連関を示していることがあげられよう。医学から哲学への影響としては、ルーフという医学上の概念の拡張による身体と魂の結びつきの問題への対処、また、能力という医学的概念の明確化に起因する生命定義の変化が論じられている。そして、イブン・スィーナーは、「植物は生きていない」という非常に特異な思想をもつに至ったことが明らかにされる。また、宗教と哲学、医学の連関としては、死後の魂の個別性というイスラーム教義に関してイブン・スィーナーが哲学的な魂論に基づく議論をしており、死後の魂の個別性を論証するにあたって、医学的なルーフ概念を援用していることが示される。

審査は、科学史を専門とする三人の教員とともに、アリストテレス哲学を専門とする研究者、中世シリア語圏の思想史を専門とする研究者によってなされ、主要な問題点として、以下が指摘された。

まず、イブン・スィーナーによる天体の議論についての検討が不十分である。本論文はルーフ概念を一つのキーワードとするが、そのルーフと天体との類似性を述べる箇所が『心臓の薬』にあるのだから、天体に関するイブン・スィーナーの考え方についてのより深い調査が必要であろう。天体の構成要素として古代ギリシア以来アイテールとして第五の元素が想定されているが、イスラーム思想におけるアイテール概念の継承や、特にイブン・スィーナーによるこの概念への対応についての検討がなされれば、ルーフ概念への彼の考え方を一層深く理解できたであろう。

また、イブン・スィーナー思想に対する後世の思想家の対応について論じられる箇所があるが、その思想家の選別が適切とは言えない。イブン・スィーナー思想の影響を述べるのであれば、批判的立場を取った代表的な人物であるアブー・ハーミド・ガザーリー、また、イブン・スィーナー哲学を復興したことで知られるナシールッディーン・トゥースィーなどを取り上げるべきであった。イブン・スィーナーは主にイラン地域で活動した思想家なのだから、その地でどう継承されていたかという観点があってもよかったであろう。

しかし、このような問題点は今後の研究が求められる課題とみなすべきであって、本論文の内容を大きく損なうものではない。本論文はイブン・スィーナー研究の一つの視座を示し、その視座は今後の研究を進めるために十分に価値があるものと評価された。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。